ナリ、御寶塔ノ御地形ハ、カクノゴトク念ヲ入テ築立サセ申スユヘ、破損ハアルマジク存ジ奉ルナリ、相輪樓ハイカヾアルヤノ上意アレバ、ソレハタシカニ見分仕ラザルユヘ、御請申上ガタシトアリテ、其後日光山ヨリ御宮御廟塔聊モ別條ナシ、所々ノ石垣ハ崩タル旨ニテ相輪樓ハ七八寸ホド斜申スト申來レバ、最初ノ頓作ノ御挨拶悉ク首尾合タル事ト、聞人感ジアヘリ、

〔泰平年表嚴有公〕寛文二年五月朔日、京都大地震禁裏院中二條城外曲輪等所々破裂、

〔一話一言十一〕寛文二年、三年、四年、五年、或御日記抄、

寛文二年十月十四日

日向國佐土原島津但馬守領地、去月十九日夥敷地震仕之由、多門長屋二三十間潰レ、侍屋敷町屋百姓屋共に都合八百軒餘潰れ、人馬牛少々死申候、けが仕候ものは數多御座候由、同廿日四十度程震り申候由、今日注進、

〔泰平年表常憲公〕元祿十六年十一月廿二日、丑刻江戸大地震、御城内外石垣多崩、武家町家共破損、相州小田原は餘國よりも強、民家破倒、〇略下

〔武江年表九〕安政元年十一月三日辰半刻、地震、市中の者は大路へかけ出す、翌五日深夜まで數度震ふ、小川町諸侯のやしきには厩潰れ、其外土藏の壁等所々に破損多く、長屋潰れて即死に及けるもありし由なり、同刻伊豆國甚しく震ひ、東海道筋これに亞りと云ふ、

〔春記〕長久元年〇長暦四年十一月一日壬子、早旦參内、依去夜地震事也、〇略中抑又此地震後不經幾程、東一品宮北屋付火、火焰及數尺、宮人即撲滅畢云々、

〔薩戒記〕應永卅二年十月廿四日庚寅、亥降地震、西方有火、嵯峨方歟云々、

〔武江年表九〕嘉永六年二月二日巳下刻、地震三度、民溜桶の水溢る、此日同刻相州小田原の城下町箱根、伊豆の熱海、三島、沼津の邊に至るまで、地震數度に及び、同夜子刻至りて、人家を覆し火災起り、死亡の輩あまたありしとぞ、町なはじめ、神戸、大磯宿、大山邊、

安政二年十月二日、亥の二點、大地俄に震ふ事甚く、〇略中品川沖御臺場の内建物潰れ、土中に入り、

火災